

02-1 最近の乳がん増加が肥満率ではなく飲酒・喫煙習慣に関連する可能性 - 国のデータを用いた子宮体がん・結腸がん・肺がんの発症率・死亡率との比較 -

新津天音、馬場一実、西澤 唯 (松本大学人間健康学部健康栄養学科)

青木雄次 (松本大学大学院健康科学研究科)

キーワード：乳がん、年齢階層別発症率、年齢階層別死亡率、飲酒・喫煙習慣、肥満率

要旨：乳がんの最近の増加を検討するため、乳がん・子宮体がんおよび男女の結腸がんと肺がんについて、10歳毎の年齢階層別発症率または死亡率と、同時期または10年前の肥満、飲酒・喫煙習慣の率との相関関係を、2005年から2015年の国の発表データをもとに調べた。50代の乳がん・子宮体がん発症率と同時期飲酒、50代・60代の子宮体がん死亡率と同時期飲酒および70代男性の肺がん死亡率と10年前喫煙が、相関係数0.9以上と強い関係を示した。乳がん発症率は、60代で同時期飲酒、40代で10年前喫煙が0.8以上で、その最近の増加は肥満より飲酒・喫煙と関連していた。

A. 目的

昨年信州公衆衛生学会総会において、2005年から2015年の乳がん発症率が、閉経前後にピークを有する二峰性のパターンで上昇し、飲酒習慣と有意な相関を示すことを、国の発表データを用いて示した¹⁾。ここでは、因果関係が明らかにされている喫煙習慣と肺がん発症率・死亡率との相関関係を含めて、昨年同様に生態学的研究として比較検討した。

B. 方法

2005年から2015年における女性の乳がん、子宮体がんおよび男女の結腸がん、肺がんそれぞれの発症率と死亡率について、国立がんセンターがん情報サービスで発表されているデータを利用した (http://gdb.ganjoho.jp/graph_db/)。また、1995年から2015年のアルコール飲酒率、喫煙率および体格指数 (BMI, body mass index) について、国立衛生研究所の国民健康・栄養調査のデータ (https://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/kenkou_eiyuu_chousa.htm) を利用した。

飲酒・喫煙習慣と肥満率が10歳毎の年齢階層別データであり、それぞれのがん発症率および死亡率を5歳毎から10歳毎の年齢階層別に再計算した。それらの率と同時期または10年前の飲酒習慣 (アルコール1日20g以上で週3日以上)、喫煙習慣および肥満 (BMI25以上) の割合 (%)

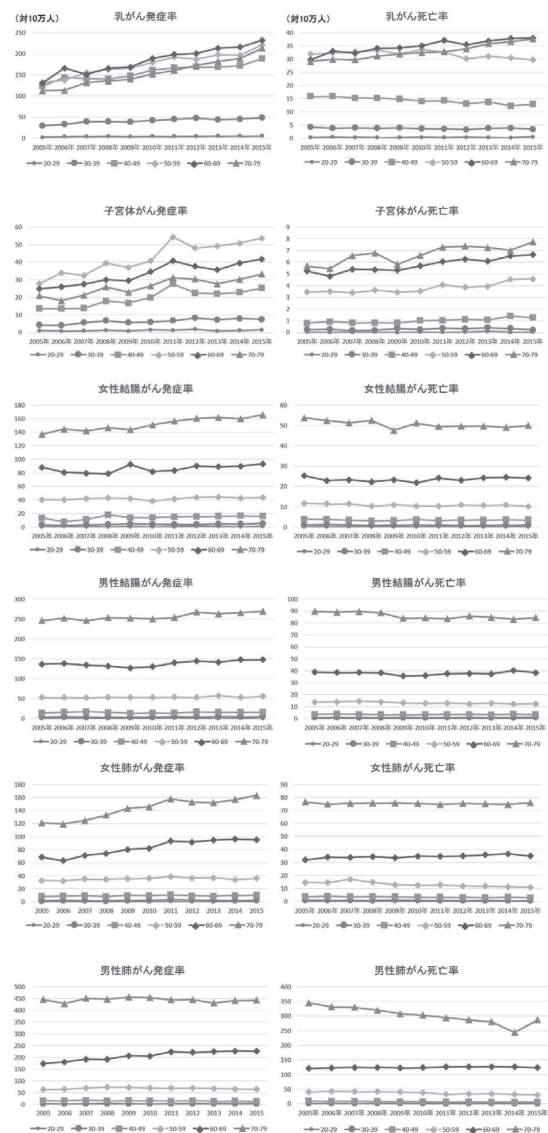


図1. 各がんの年齢階層別発症・死亡率の推移

との直線的相関関係をピアソン相関係数により解析し、 $p < 0.05$ を統計的に有意とした。

C. 結果

結果を、図1と表1に示す。

D. 考察

これまでの報告と同様に、男性の肺がん死亡率が喫煙と相関することが示された。ホルモン依存性の乳がんと子宮体がんが、飲酒・喫煙習慣と有意な相関を示したことより、それらに関連する女性の生活環境に注目すべきであると考えられた。

E. まとめ

最近日本で急増する乳がん発症は、肥満ではなく飲酒・喫煙に関連する食習慣または生活習慣の変化が関係している可能性が示唆された。

F. 利益相反

利益相反なし。

G. 文献

- 1) 栗林快, 鈴木香夏美, 青木雄次: 飲酒に関連する西洋化生活習慣と二峰性に急増する乳がん発症率との関係. 信州公衆衛生雑誌 16 (1) : 42-43. 2021.

表1. 各がん発症・死亡率と同時期または10年前の肥満、飲酒・喫煙習慣率との年齢階層別相関係数

Table with 12 main sections: 乳がん発症率, 女性結腸がん発症率, 女性肺がん発症率, 乳がん死亡率, 女性結腸がん死亡率, 女性肺がん死亡率, 子宮体がん発症率, 男性結腸がん発症率, 男性肺がん発症率, 子宮体がん死亡率, 男性結腸がん死亡率, 男性肺がん死亡率. Each section contains a 5x5 grid of correlation coefficients and p-values for age groups 30-39, 40-49, 50-59, 60-69, and 70-79 years.

太字の黒字は有意の正相関、通常黒字は有意の負相関、グレーの字は有意の相関なしを表す